

## 中世大隅正八幡宮をとりまく空間構造

— 社家館跡の調査から —

重久 淳一

## The spatial structure surrounded O-sumisho-hachimangu shrine in the Middle Ages

Jun'ichi SHIGEHISA

## SUMMARY

This article takes into consideration on an analysis of both locations where o-sumisho-hachimangu shrine, other temples, and mansions are, and “spatial structure” of the Miyauchi area in Hayato town, Kirishima city.

As a result, the following three points are found. First the Mansions of Kuwahata, Rusu, Sawa, and Saisho-ji, which were homes to four famous priest families, show that they were surrounded and protected by earthen moats or earthen walls, and constituted a mansion group made up of nearly one hundred mansions. Second it was found that there used to be main roads during the 14th century in this area where historic sites are concentrated, as well as the ports which are related to o-sumisho-hachimangu shrine.

Third, the whole area had a closed “spatial structure” as well as protecting the mansions. But on the special occasions such as festivals, it appears that this area might possibly have had an open “spatial structure”.

キーワード：宮内地区，大隅正八幡宮，寺院群，社家館跡群，空間構造

## 1 はじめに

鹿児島県霧島市隼人町に所在する宮内地区は、大隅正八幡宮と呼ばれた鹿児島神宮の発展とともに築かれてきた街並みである。錦江湾の奥部に位置する大隅正八幡宮は、鎌倉初期、建久8（1197）年の『建久凶田帳』によると、およそ3,000町の大隅国のうち1,296町を有し、1,465町を有する島津荘と二分する勢力を築いていた<sup>1)</sup>。正八幡宮には、世襲の四社家と呼ばれる桑幡・留守・沢・最勝寺氏を中心に多くの神人・寺人などがおり<sup>2)</sup>、現在もその子孫たちが居住している。また、周辺には正八幡宮に係わる寺院群も配置され、中世には「宮内衆」として登場するなど<sup>3)</sup>、一大勢力を有していた。近年の社家館跡や寺院跡の発掘調査では、堀と土塁を巡らす1町四方の館跡や多量の貿易陶磁の出土がみられ、極めて、規格性を有する地域だとい

<sup>1)</sup> 五味克夫 1960「大隅国建久凶田帳小考－諸本の校合と田数の計算について－」『日本歴史』142, 36～54頁。

<sup>2)</sup> 五味克夫 1978「大隅国正八幡宮社家小考」『続荘園制と武家社会』竹内理三博士古稀記念会編 吉川弘文館, 190～224頁。

<sup>3)</sup> 明応4（1495）年の記録では、「宮内衆」の他に「社家衆」としても登場し、一定の集団を形成していたことが窺われる（鹿児島県1980『旧記雑録前編二』史料1738・1739号, 568頁）。

うことが判明した<sup>4)</sup>。ここでは、発掘調査の結果及び現存する地籍図等から中世大隅正八幡宮をとりまく宮内地区の空間構造を検討する。

## 2 研究抄史

大隅正八幡宮や社家等については、いくつかの分野から研究されているが、当初から、文献による研究が主体をなす。戦前の昭和14年に刊行された『鹿児島県史第一巻』では、「社寺と社寺領の発達」という項目の中で、かなりの頁数を割いて大隅正八幡宮について述べている<sup>5)</sup>。『延喜式』の鹿児島神社と後に記録に現れる正八幡宮との関係や社領・社人について記している。戦後は、五味克夫氏を始めとして、日隈正守・福島金治氏らによってなされている<sup>6)</sup>。文献以外の分野についてみると、藤浪三千尋氏による石塔からのアプローチがある。藤浪氏は、弥勒院・正興寺等墓域や沢家墓碑群について、紀年銘や梵字などの分析から石造文化の実態を明らかにした<sup>7)</sup>。また、文学の分野では、白石一美氏が『平家物語長門本』と社家の桑幡氏との係わりを示した<sup>8)</sup>。建築学では、古くは樺山昭氏による留守氏館の調査があり、戦後間もない時期に貴重な屋敷の間取りが記録されている<sup>9)</sup>。近年では、土田充義氏による神宮の社殿調査などがある<sup>10)</sup>。このようにいくつかの分野から宮内地区に係わる分析がなされてきた。しか

4) 平成6年度の弥勒院跡の発掘調査を手始めに周辺が調査されるようになり、当初は工事に先立って、平成15年度からは保存整備目的で確認調査が行われるようになった。これまで、弥勒院跡が5次、桑幡・留守氏館跡が6次に亘って調査され、沢・最勝寺氏館跡・大隅正八幡宮跡は確認のための1次調査がなされている。整理途上で、報告書が刊行されていないものもあり、ここでは、事業報告書も利用した。(①隼人町教育委員会1996『弥勒院』, ②隼人町教育委員会・隼人町遺跡調査会2001『留守氏館跡』, ③隼人町教育委員会2003『桑幡氏館跡Ⅱ-第3次調査-』, ④同2005『留守氏館跡Ⅱ-第3・4次調査-』, ⑤霧島市教育委員会2006『桑幡氏館跡Ⅱ-第1・2・4・5次調査-』, ⑥同2008『留守氏館跡Ⅲ-第5・6次調査-』霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書(4), ⑦同2007『沢氏館跡-第1次調査-』保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告, ⑧同2008『最勝寺氏館跡-第1次調査-』保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告, ⑨同2009『大隅正八幡宮跡-第1次調査-』保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告)宮内地区全体について記述したものに、⑩同2007『平家物語の世界を訪ねて-堀と土塁に囲まれた館-』(第2版), ⑪重久淳一2003『南九州の中世居館-大隅正八幡宮社家館跡群の調査から-』(中世都市研究会2003年九州大会実行委員会編『中世都市研究会2003年九州大会資料集』149~160頁)がある。

5) 鹿児島県1939『鹿児島県史第一巻』(昭和42年復刊)182~215頁。

6) ①五味克夫前掲註2, ②同1986『大隅国正八幡宮関係文書拾遺』『鹿児島中世史研究会報』43 鹿児島中世史研究会, ③日隈正守1992『諸国一宮制成立期に関する一考察』『九州史学』第104号九州史学会, ④同1999『律令国家の変質と中世社会の成立』『鹿児島県の歴史』県史46 山川出版社, ⑤同2007『大隅国正八幡宮祭神考』『鹿児島地域史研究』No.4 鹿児島地域史研究会, ⑥同2008『大隅国正八幡宮社家機構の形成過程』『鹿児島大学教育学部研究紀要』第59巻, 鹿児島大学教育学部, ⑦福島金治2008『中世後期大隅正八幡宮社家の存在形態』『中世一宮制の歴史的展開-上: 個別研究編-』岩田書院, ⑧栗林文夫1995『大隅国台明寺の寺領構造について-正応四年台明寺寺田注文の分析を中心に-』『九州史学』112九州史学会, などがある。

7) 藤浪三千尋1989『始良郡隼人町宮内 正興寺跡歴代住職墓塔群と関連の墓石塔について』『南九州の石塔』8号 南九州古石塔研究会。

8) ①白石一美1972『長門本平家物語 伯耆局説話の形成とその享受』『中世文芸』第50号後集66~80頁, ②同1978『平家物語における二, 三の説話の形成過程-“物怪沙汰”と“伯耆局事”-』『宮崎大学教育学部紀要』第44号1~16頁。

9) 樺山昭1949『鹿児島地方の民家』南日本建築文化会58~62頁。

10) (土田充義他1997『鹿児島神宮文化財調査報告書』鹿児島神宮)では、土田氏が社殿の実測図と内部構造について記している。他に、日隈正守・藤浪三千尋氏が大隅正八幡宮の歴史や概要について述べている。

し、宮内地区全体の様相については、これまでほとんど明らかにされていないのが実情である。近年、これまでの文献史料や地上資料では明らかにできなかった中世の宮内地区の社家の館や周辺の様相が、発掘調査によって徐々に明らかになってきた。そこで、地理学的研究<sup>11)</sup>と考古学の成果<sup>12)</sup>から、宮内地区の空間構造を分析してみた。本稿では、区画整理事業実施前の測量図と地籍図を用いて検討を行った。

中世都市研究を概観すると、戦前、原田伴彦は、社会的分業が行われている聚落集団を都市と考え、都市の種類を次のように分類している<sup>13)</sup>。(Ⅰ)社寺関係都市(門前町・寺内町)、(Ⅱ)港津関係都市、(Ⅲ)宿駅関係都市、(Ⅳ)政治関係都市、(Ⅴ)市場関係都市の5つである。本論に係わりのある(Ⅰ)の社寺関係都市で、原田氏は伊勢神宮・延暦寺・石清水八幡宮・宇佐八幡宮など著名な全国55ヶ所の都市をあげ、その発展段階を分析している。しかし、九州の中で取り上げられた場所は、豊前の宇佐八幡宮と日向大光寺の2ヶ所であり、大隅正八幡宮については研究も進んでいなかったこともあり、当然、触れられることもなかった。その状況は、現在に至るまで続いているといわざるを得ない<sup>14)</sup>。

<sup>11)</sup> 都市研究には主として文献・地理学・建築学からのアプローチが先行し、次いで、1980年代に考古学の成果が取り入れられるようになった。前者の主なもの、①鳥羽正雄 1929「中世末期の関東に於ける都市の発生過程」『都市地理研究』人文地理学報第1輯 刀江書院、②松本豊寿 1967『城下町の歴史地理学的考察』吉川弘文館、③藤本利治 1976『近世都市の地域構造』古今書院、④豊田武・原田伴彦・矢守一彦編 1982『講座 日本の封建都市 - 第1巻総説篇 -』文一総合出版、⑤京都大学文学部地理学教室編 1983『空間 景観 イメージ』地人書房、⑥足利健亮 1984『中近世都市の歴史地理』地人書房、⑦高橋伸夫他 1984『都市地理学入門』原書房、⑧山崎謹哉編著 1985『近世歴史地理学』大明堂、⑨矢守一彦編 1987『城下町の地域構造』日本城郭史研究叢書第12巻 名著出版、⑩高橋康夫他編 1993『図集日本都市史』東京大学出版会、⑪都市史研究会編 1993『年報都市史研究2 - 城下町の類型 -』山川出版社、⑫横井靖仁 1994「戦国期賀茂社争乱に関する一考察」『年報中世史研究』第19号 中世史研究会、⑬桑原公德編著 1999『歴史地理学と地籍図』ナカニシヤ出版、⑭佐藤信・吉田伸之編 2001『都市社会史』新体系日本史6 山川出版社。

<sup>12)</sup> 考古学の発掘調査成果を取り入れたものには、児島道裕氏の論考があり、以後、いろいろな分野の研究成果を集約した学際的な研究が続くようになる。①児島道裕 1987「戦国期城下町の構造」(矢守一彦編『城下町の地域構造』日本城郭史研究叢書12 名著出版 37~75頁)、②小野正敏 1987「越前一乗谷における町屋について」(矢守一彦編『城下町の地域構造』日本城郭史研究叢書12 名著出版 77~104頁)、③石井進編 1991『考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 名著出版、④網野善彦・石井進編 1992『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 名著出版、⑤小島道裕 1993「戦国期城下町から織豊期城下町へ」『年報 都市史研究1 - 城下町原景 -』山川出版社、⑥中世都市研究会 1994『都市空間 中世都市研究』1 新人物往来社、⑦小野正敏 1997『戦国期城下町の考古学』講談社、⑧千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、⑨小野正敏編 2006『中世都市の調査分析方法に関する研究』国立歴史民俗博物館研究報告 第127集 国立歴史民俗博物館、⑩藤本 強 2007『都市と都城』市民の考古学2 同成社。

<sup>13)</sup> 原田伴彦 1972『中世における都市の研究』三一書房(復刻) 3~24頁。

<sup>14)</sup> 原田氏が(Ⅰ)と分類した社寺都市の研究についてみると、いまだ研究の主体は寺院についての研究であり、神社については進展していない状況がみられる。その中で、文献から上賀茂神社の社家等について論述した①須磨千穎 1995「賀茂境内六郷」『講座日本荘園史7 - 近畿地方の荘園II -』吉川弘文館や②横井靖仁 1994「戦国期賀茂神社争乱に関する一考察」『年報中世史研究』19号などがあり、また、考古学的に調査された③豊中市教育委員会 2008『大阪府指定史跡 春日大社南郷目代今西氏屋敷総合調査報告書』は目を引く。今西氏屋敷の調査では大きな成果があった。現在も子孫が居住し、二重の堀が周りを取り囲むなど宮内地区と類似する点もある。だが、春日大社という、城でいえば本丸にも相当する場所とは遠く離れているため、中心となる春日大社との空間関係は当然問題とならないであろう。このようなことを鑑みるに、宮内地区は、後に述べる中心となる境内としての神社と社家の位置関係や係わりも明確であることから、いまだ研究の進んでいない社家の館と寺院群の、中世の宗教的な空間を研究する上で、極めて重要な位置にあると思われる。

都市研究は戦後に多くの蓄積があり、特に京都・堺など自治都市の研究には目覚ましいものがあり、小林健太郎氏や仁木宏氏らによって研究史の整理が行われている<sup>15)</sup>。その後の社寺の都市研究についてみると、寺内町の研究にその主力は注がれる。真宗寺内の研究が多くを占めるようになり、吉崎・山科や大坂石山寺内町について、西川幸治・脇田修・金井年らによる研究<sup>16)</sup>など数多くなる。中世の寺社勢力について、政治史・経済史から分析したのが伊藤正敏氏である<sup>17)</sup>。伊藤氏は技術の集合を寺社勢力の中に見出し、経済都市として寺社勢力を分析している。このような都市のもつ内部構造の視点から、空間構造へ展開するのは、1980年代に入ってからであり、考古学の成果からの城下町論が活発となる。児島道裕氏によって、戦国期城下町の二元性の空間構造論が提示され<sup>18)</sup>、その後、中世都市研究会という学際的な研究へ進む動きとなっていく。そのような中で、児島氏の二元論を発展させ、それを地理学の立場から「境内」と「町屋」として中世における都市論へ帰結せしめたのは伊藤毅氏である<sup>19)</sup>。伊藤氏は、核となり中心となる社寺の「境内」とその他の「町屋」に分節し、古代と近世の間にある中世都市研究の方向性を示した。古代都市の絶対方位にもとづく条坊制による整然とした方格状の都市形態と、近世都市の身分制にもとづく地域割りで分節する城下町との間にある中世都市を「境内」と「町屋」という分節構造で示したのである。本論では、これらの研究成果に基づいて、宮内地区の空間構造の分析を試みるものである。

### 3 宮内地区の地理的・歴史的環境（図4）

宮内地区は、鹿児島県霧島市隼人町神宮一丁目～六丁目などに所在する地区である。かつては大字内山田・見次・内に分かれていた<sup>20)</sup>。北側を天降川の氾濫原である沖積平野が限り、南側を東流する角之下川に挟まれた三角形の台地にある<sup>21)</sup>。宮内と呼ばれるこの地も、今では小学校名に名を残すのみである<sup>22)</sup>。鹿児島神宮は標高約250mのシラス台地の直下であり、山

<sup>15)</sup> 研究史については、①小林健太郎 1985「序章 戦国城下町の歴史地理学的研究の歩み」（『戦国城下町の研究』大明堂 1～18頁）、②仁木宏 1993「戦国・織豊期都市史研究の一視角－寺内町論のためのノート－」（都市史研究会編『城下町の原景 年報都市史研究 1』山川出版社 127～139頁）、空間構造については、③山村重希（2009『中世都市の空間構造』吉川弘文館）が整理し、課題については④宇佐見隆之 2001「中世都市研究の課題」（佐藤信・吉田伸三編『都市社会史』新体系日本史 6 山川出版社）などがある。

<sup>16)</sup> ①脇田修 1982「寺内町の歴史的特質」『講座 日本の封建都市－第1巻総説篇－』文一総合出版 143～164頁、②西川幸治 1974「第1章 寺内町の形成と展開」『日本都市史研究』日本放送出版協会、③金井年 1995「寺内町の形成と原集落」『寺内町研究』創刊号 貝塚寺内町歴史研究会、④同 2004『寺内町の歴史地理学的研究』日本史研究叢書15 和泉書院、⑤山科本願寺・寺内町研究会編 1998『戦国の寺・城・まち－山科本願寺と寺内町－』、⑥水田義一 1982「寺内町の建設プラン」『講座 日本の封建都市－第1巻総説篇－』文一総合出版 165～188頁、などがある

<sup>17)</sup> 伊藤正敏 1999『中世の寺社勢力と境内都市』吉川弘文館。

<sup>18)</sup> 前掲註12の①文献。

<sup>19)</sup> 伊藤毅 1993「境内と町」『年報 都市史研究 1－城下町の原景－』山川出版社 23～36頁。

<sup>20)</sup> 住居表示の変更により、平成11年2月1日から周辺は神宮1～6丁目になった。

<sup>21)</sup> 台地は標高が約15mであるが、昭和29年の測量図をみると、平坦ではなく、凹凸があることが分かる。

<sup>22)</sup> 中世には宮内と呼ばれていたが（前掲註3）、現在では、大字としても残ってなく、かろうじて校区と呼ばれるのみである。藤原成経が赦免された時に立ち寄った際の和歌にも登場するという（平凡社地方資料センター編 1998『鹿児島県の地名』日本歴史地名体系第四七巻 平凡社 630頁）。



裾から突き出した標高約30～50mの舌状台地上に立地する。社家館跡群や別当寺は、そこから一段下がった海拔約15mの台地にある<sup>23)</sup>。シラス台地下の山裾の主軸は、南西から北東に延びており、それに沿うような形状で2×2kmの三角形の台地が広がる。

宮内地区の中央付近には辻の角と呼ばれる交差点がある。神宮の参道と直交するように北東から南東に幹線道路が走る。この道路は、かつては二級国道であった。参道の東側延長線上、天降川の近くに大津という地名が残っており、大津氏に関わる石塔群も残存する。大津氏は「社家の一つで、天降川の渡航を支配する検校役」とされ<sup>24)</sup>、川湊を管理する人物だったとされる。天降川を挟んで東側は旧国分市の府中地区であり、古代の大隅国府推定地である<sup>25)</sup>。大津は国府という政治的な場所と宮内という宗教的な場所に係わる川湊だった可能性もある。

宮内地区には、鹿児島神宮を中心に社家の館、寺院群などが広がっていた。宮内小学校の建っている場所は別当寺の弥勒院跡である<sup>26)</sup>。西側の隣接する場所には弥勒堂があった。参道を挟んで向かい側は桑幡氏館跡で、現在76代目が居住する。辻の交差点の東南には、留守氏館跡があり、良好な土塁が残存する。また、交差点から北東約200mには最勝寺氏館跡、その北には沢氏館跡が立地する。四社家のうち沢氏だけが断絶するが、他の三氏は継承されている<sup>27)</sup>。寺院群は、神宮の東の山裾に正興寺、西には正高寺があった。これらの寺院は南西にある正国寺とともに、大隅正八幡宮に関係する三ヶ寺（本地寺）である<sup>28)</sup>。

宮内地区には、中世に繁栄した大隅正八幡宮を取りまくように、四社家の館跡群や寺跡群（弥勒院・弥勒堂・正興寺・正高寺・正国寺・正行寺<sup>29)</sup>）があり、「求心力をもつ空間」である。

#### 4 大隅正八幡宮

旧官幣大社で大隅国一宮である。祭神は彦穗々出見尊（山幸彦）で、他に仲哀天皇・応神天皇などを祭る<sup>30)</sup>。社伝によると和銅元（708）年の建立で、延喜式では鹿児島神社として登場するが、寛治2（1088）年の記録で八幡宮化していることが確認される<sup>31)</sup>。12世紀前半には、

<sup>23)</sup> 標高10m前後の台地は「隼人面」と呼ばれ、縄文海進以後隆起したといわれている（森脇他 1986）。従って、縄文時代早期以後、この台地には人が居住するようになってくる（森脇宏他 1986「鹿児島湾北岸におけるマグマ水蒸気噴火とこれに影響を与えた縄文海進」『地学雑誌』95-2）。

<sup>24)</sup> 藤浪三千尋編2007『隼人町の石造文化財』霧島市教育委員会 27頁。

<sup>25)</sup> 大隅国府の所在地は霧島市国分府中地区が有力視されているが、特定されていない。近年、国衙域と思われる一角の気色の杜遺跡から9世紀後半の土師器に和歌と思われる「仮名」文字が書かれた墨書土器が出土し、注目されている（2009年9月19日付南日本新聞記事）。

<sup>26)</sup> 原口虎雄監修 1982『三国名勝図会』第三卷 青潮社 65頁。

<sup>27)</sup> 桑幡氏が最も神宮に近い場所に居住し、中世の頃は桑幡氏、江戸時代になると留守氏が有力になったようだ。明治維新当分の石高は、留守氏170石、桑幡氏160石、沢氏70石、最勝寺氏25石であった（三ツ石友三郎編 1985『隼人郷土誌』隼人町 571頁）。

<sup>28)</sup> 前掲註26文献の66～77頁。

<sup>29)</sup> 正行寺は、一遍上人に係わる寺院とされ（前掲註26文献84頁）、周辺に道場という小字名が残っている。しかし、発掘調査は行われていない。

<sup>30)</sup> 日隈正守氏によると、本来は八幡神が中心であったものが、18世紀後半から彦穗々出見尊（山幸）が主体となってくるといふ（前掲註6文献⑤）。

<sup>31)</sup> 『延喜式』では鹿児島神社として登場する（藤波優 1999『中院家本 延喜式巻第十』燃焼社 97頁）が、その後、八幡宮化する。記録からは11世紀後半には八幡化しているとされるが、日隈正守氏は長元7（1034）年、大隅国内に存在していた「八幡別宮」の支配権を認められた元命の記録から、さらに古く、長元7年以前の10世紀末～11世紀初期と考えている（前掲註6の文献⑥）。

大隅国守を父にもつ行賢が活躍し、社領の拡大や権威の増加を図り、『建久凶田帳』では島津荘と二分する勢力となっている<sup>32)</sup>。『隼人郷土誌』に記された7回の火災記録のうち、大永7(1527)年の本田董親による隅州の乱が激しく、正八幡宮はもちろん、正興寺・正高寺・弥勒院もともに焼けたとされる<sup>33)</sup>。その後、第15代島津貴久や日秀上人らによって永禄3(1560)年に再建された<sup>34)</sup>。宝暦6(1756)年に建造された現在の社殿は県指定となっている<sup>35)</sup>。維新当時の石高は763石である。建治3(1277)年には一遍上人も参籠している<sup>36)</sup>。

神宮文書が県指定で、国指定の南北朝時代の紺糸威鎧や保安2(1121)年の補任状に押されている「八幡宮印」の古印や14~15世紀前半のタイの灰陶印花象文壺、中国の明代の龍泉窯系青磁壺など海外の陶磁器が多い<sup>37)</sup>。祭祀としては、馬踊りで知られる初午祭や隼人舞が実施されている。平成21年度の発掘調査で古代~中世の土坑や地業層、多量の土師器や貿易陶磁器が見つかった。20点近いタイ産の壺の半数が火災等によって2次的に被熱していた<sup>38)</sup>。

## 5 寺院群

**弥勒院跡** 大隅正八幡宮の別当寺で、弥勒院は初め鷲峰山靈鷲山寺と称し、僧性空(960年代の人物)の開基といわれる。本尊は釈迦如来・不動明王。一時衰退していたが、享保8(1723)年に上野寛永寺末弥勒院として再興され、近世には天台宗となっている<sup>39)</sup>。明治維新時の石高は300石。校舎の増築などの工事に先立って5回に亘って発掘調査され、池跡・溝址や土師器焼成土坑と思われる遺構も見つまっている。多量の中国製青磁・白磁・陶器・青花、東南アジアのタイ産の壺、ベトナム産陶器や出土が稀な元代の飛青磁、多量の土師器、国内産中世陶器、近世の肥前系陶磁器、在地系陶磁器なども見つまっている。出土した越州窯系青磁や一定量みられる須恵器等からみて、10世紀頃には建てられていた可能性が考えられる<sup>40)</sup>。

**正興寺** 神宮の北東約1kmの位置に墓地のみ残存する。『三国名勝図会』(原口1982)には用水路の上に本堂が描かれており、この付近に位置することは疑いないが、発掘調査はされていない。大隅正八幡宮の三本地寺の一つで、梅霊鷲山正興寺。京都建仁寺の末寺で禅宗・臨済宗。

<sup>32)</sup> 前掲註1文献。

<sup>33)</sup> 回数については、「郷土史年表」から拾い上げたもので、筆者が検証したものではない(三ツ石友三郎編1985『隼人郷土誌』隼人町593~634頁)。大永年間の守護代の本田氏が攻撃した時の記録は、『旧記雑録前編二』史料2107・2111・2112号)。

<sup>34)</sup> 神宮境内に宝暦7(1757)年に建てられた「正宮山植杉記碑」があり、碑文で日秀上人が永禄3(1560)年に作り替えたとの銘文が刻まれている(隼人町教育委員会1997『石碑に刻まれた町の歴史-隼人町の石碑類-』隼人町教育委員会文化財シリーズII)。

<sup>35)</sup> 現在の社殿が建てられた記念碑が神宮境内にあり、宝暦6年に建てられたことが記されている(前掲註34文献)。平成2年に本殿・拝殿・勅使殿が県指定となった。

<sup>36)</sup> 小松茂美編1978『一遍上人絵伝』日本絵巻大成別巻中央公論社88~91頁。

<sup>37)</sup> 重久淳一2004「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『シンポジウム 陶磁器が語る交流-九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器-』東南アジア考古学会・九州国立博物館誘致推進本部・鹿児島大学埋蔵文化財調査室、47~66頁。

<sup>38)</sup> 前掲註4の文献⑨。

<sup>39)</sup> 前掲註26の文献65~70頁。

<sup>40)</sup> 現在、出土遺物の整理が行われているが、成果の一部は前掲註4の⑩・⑪を参照。

本尊は釈迦如来。創建は永仁年間（1293～99）といわれ、勧請開山は仏智円応<sup>41)</sup>。住職に薩摩の朱子学の祖といわれる39世の桂庵玄樹やその弟子の41世南浦文之などがいた<sup>42)</sup>。背後の山は鳥津氏久が姫木城を攻めた時、3年在陣したという笑隈城である<sup>43)</sup>。近世の寺領は41石。

**正高寺** 神宮の西約300mにあり、周辺に古墓が残るのみで実態は不明である。大隅正八幡宮の三本地寺の一つで、宝来山成菩提院正高寺。真言宗で、本尊は観音。鹿児島大乘寺の末寺で、正平3（1348）年、僧一慶の開基と伝えられている<sup>44)</sup>。寛正5（1464）の古墓など数基残っている

**正国寺** 神宮の南西、直線距離で約1kmの山裾にある。周辺には石塔等が散在し、五輪塔や墓石も多数あったが、宅地造成により消失したものもある。昭和58年に石仏3体が発見され、そのうちの2体の光背前面に大隅国分寺石塔と同じ康治元（1142）年の銘が刻まれていた（八尋1995）。大隅正八幡宮の三本地寺の一つで、霊山無量寿院正国寺。律宗で、本尊は阿弥陀。大和西大寺の末寺で、元徳年間（1329～31）、僧円秀の開基と伝えられている<sup>45)</sup>。

## 6 社家館跡群（図9）

**桑幡氏館跡** 神仏混淆であった大隅正八幡宮には、別当寺も含め多くの神官・神人・僧侶が係わっている。「四社家」、「十家」又は「一家」、「衆徒十五坊」、「殿守十二家」、「四十七家」、「隼人十八家」など百十家があり（表1）、中でも世襲の四社家は、それらを統括する立場にあった<sup>46)</sup>。桑幡氏は、息長氏姓を称し、現在の当主で76代目となる<sup>47)</sup>。長く大隅正八幡宮の四社家

<sup>41)</sup> 前掲註26の文献66～70頁。

<sup>42)</sup> 正興寺僧には三十九世桂庵玄樹（1427～1508）、四十世雲叔、四十一世文之玄昌（1555～1620）がいる。文禄・慶長の役の頃、万暦21（1593）年、福建軍門の許豫・史世用らが内之浦に入船し、「薩摩・明の合力計画」を図ったとされるが、「大隅州正興寺の倭僧玄龍」が内之浦に来て尋問したことが『敬和堂集』に登場する。玄龍の名は『上井覚兼日記』にも「玄龍首座」としてみられる（天正11（1583）年：「此座に玄龍首座と申被有合候」）。この玄龍を佐々木綱洋氏は文之玄昌ではないかと考えている。ともあれ、禅宗系の僧侶が国際的に活躍している様子が窺われる（佐々木綱洋2009『都城唐人町 海に開く南九州-16～17世紀日中交流の一断面-』鉦脈社）。

<sup>43)</sup> 笑隈城あるいは隈之城とも呼ばれる（鹿児島県教育委員会1987『鹿児島県の中世城館跡-中世城館跡調査報告書-』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（43））。

<sup>44)</sup> 前掲註26の文献76～77頁。

<sup>45)</sup> 前掲註26の文献70～76頁及び八尋和泉1995「鹿児島県の彫刻 康治銘石仏と頂相二例その他」『鹿児島県文化財調査報告書第41集』鹿児島県教育委員会。

<sup>46)</sup> 前掲註2文献。

<sup>47)</sup> 系図は「桑幡くわばた 大隅正八幡宮（現鹿児島神宮 霧島市隼人町）の留守・最勝寺・沢氏と並んで四祠官の一。息長姓で開化天皇-彦坐王-山代之大筒木真若王-迦爾米雷王-息長宿祿王と続き、息長宿祿王は近江国坂田郡息長（滋賀県米原市）を本拠とした。息長宿祿王から公古に至るまでの系不詳。家伝瓊々杵尊皇子の火闌降命（隼人命）を祖とする。高160石。子孫霧島市隼人町宮内住。公古<sup>27)</sup>-公清<sup>28)</sup>-公光<sup>29)</sup>-公翁<sup>30)</sup>-泰翁<sup>31)</sup>-泰元<sup>32)</sup>-助泰<sup>33)</sup>-公秀<sup>34)</sup>-公安<sup>35)</sup>-公定<sup>36)</sup>-公半<sup>37)</sup>-公義<sup>38)</sup>-公通<sup>39)</sup>-通昌<sup>40)</sup>-信昌<sup>41)</sup>-信重<sup>42)</sup>-重家<sup>43)</sup>-重頼<sup>44)</sup>-頼春<sup>45)</sup>-頼元<sup>46)</sup>-頼康<sup>47)</sup>-頼吉<sup>48)</sup>-頼弦<sup>49)</sup>-助頼<sup>50)</sup>-助良<sup>51)</sup>-助清<sup>52)</sup>-清道<sup>53)</sup>-助道<sup>54)</sup>-栄道<sup>55)</sup>-道継<sup>56)</sup>-道秀<sup>57)</sup>-道久<sup>58)</sup>-道世<sup>59)</sup>-道昌<sup>60)</sup>-道恒<sup>61)</sup>（道世弟道之子道宗嫡子）-道泰<sup>62)</sup>-道重<sup>63)</sup>-道元<sup>64)</sup>-道景<sup>65)</sup>-道延<sup>66)</sup>-道隆<sup>67)</sup>-道武<sup>68)</sup>-道好<sup>69)</sup>-道渡<sup>70)</sup>-道賢<sup>71)</sup>-道盈<sup>72)</sup>-公朝<sup>73)</sup>-公幸<sup>74)</sup>-公秀<sup>75)</sup>-和幸<sup>76)</sup>と続く。子孫公秀は鹿児島神宮・新田神社・日秀神社神官・名誉主典、その子和幸は愛知県犬山市針綱神社神官を務める。」（川崎大十2000『「さつま」の姓氏』高城書房を一部改変、現在、長男・次男ともに神官である）。他に、桑幡文書を収めたものに、鹿児島県2005『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ十』がある。

として、留守・沢・最勝寺氏とともに神宮の繁栄を支えてきた。桑幡家には建久凶田帳の写しの他、多くの文書が残っている。これまで6回調査され、館を取り囲む堀や池状遺構などが検出された。堀は葉研状を呈し、幅約4m、深さ3mを測る。館の規模はおよそ南北90m、東西100mの区画で、弥勒院跡と同様、貿易陶磁器や土師器が多量に出土している。中国・高麗・タイ・ベトナム産陶磁器などがみられた<sup>48)</sup>。注目されるのは、12～13世紀の畿内産楠葉・和泉型瓦器が見つかったことである。その流通には撰関家の関与が指摘されている<sup>49)</sup>。日隈正守氏によると、平清盛と第53代桑幡清道が親しく交わっている「長門本平家物語」の説話が平氏と大隅正八幡宮との親密な関係を示し、平氏は国衙の有力な在庁官人である建部氏の国衙機構をとおして大隅国に勢力を延ばしてきたとする(註6文献④)。

出土した多量の土師器は、『上井覚兼日記』<sup>50)</sup>にみられるように、式三献の室町儀礼が邸内で行われていたことを窺わせる<sup>51)</sup>。桑幡氏は11世紀後半頃には、ここに居住していることが、発掘で出土した陶磁器から考えられている。

**留守氏館跡** 参道と旧国道の交差点の南東にあり、神宮から約600mの位置にある。留守氏は紀氏姓を称し、「貞治2(1363)年、留守左衛門入道景信が石清水善法寺より下向した」といわれる。現在の当主で16代目<sup>52)</sup>。館は6次に亘って発掘調査された。幅4～7m、深さ3～4mの堀跡や貿易陶磁器が見つかった。館内には、今なお高さ約3m、幅約11mの土塁が、40mの長さで残っている。土塁は版築工法で構築されていた。館の形状は、北西が屈曲する平面形を呈する<sup>53)</sup>。昭和24年の屋敷の配置図によると(前掲註9、図10)、周囲は堀と竹林に囲まれており、約1町歩の面積を有すると記されている。東西の距離は堀間で約70m、南北は100mを越すであろう<sup>54)</sup>。

**沢氏館跡** 舌状台地にあり、東は天降川の氾濫原に接し比高差は約5mである。沢氏は「嵯峨天皇より出、姓は源朝臣、承和9(842)年下向した」といわれ(三ッ石友三郎編1985『隼人郷土誌』隼人町)、田所検校などの職にあった。明治維新時は70石。多くの文書が『旧記雑録』に集録されている。館内にある市指定の沢家墓碑群は径8.5×8m、高さ約1mの方形の封土の上に、49基の板碑が4.5×3.2mの範囲に長方形に並び、その中に延応元(1239)年の石塔や五輪塔がある。また、嘉禎3(1237)年銘の自然石柱もある。平成18年度の調査で、幅5m以上、深さ2.5mの堀を確認し、沢氏館跡にも堀が巡ることが判明した<sup>55)</sup>。遺物は、桑幡氏と同様、11世紀後半の遺物からみられ、16世紀のタイ産黒褐釉壺も出土している。

<sup>48)</sup> 前掲註37文献。

<sup>49)</sup> 橋本久和2009「第1部 瓦器碗研究と中世史 第2章 瓦器碗の地域相」『中世考古学と地域・流通』真陽社13～24頁。

<sup>50)</sup> 東京大学史料編纂所1998『大日本記録 上井覚兼日記(上・中・下)』岩波書店。

<sup>51)</sup> 天正12(1584)年12月13日に桑幡道隆(67代)の三男の元服があり、その際、式三献やプレゼントの交換が行われている。留守式部大輔藤景氏(9代)や弥勒院の大圓坊も参席したということが記されている。また、時には「平家」なども語らせたようで(前掲註8の文献①)、琵琶法師の出入りも窺わせる。

<sup>52)</sup> 景信<sup>1</sup> - 幸範<sup>2</sup> - 景延<sup>3</sup> - 景俊<sup>4</sup> - 景照<sup>5</sup> - 景政<sup>6</sup> - 義景<sup>7</sup> - 景親<sup>8</sup> - 藤景<sup>9</sup> - 景廣<sup>10</sup> - 景種<sup>11</sup> - 景恒<sup>12</sup> - 景意<sup>13</sup> - 景次<sup>14</sup> - 景廣<sup>15</sup> - 景彦<sup>16</sup> (鹿児島県2005『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ十』を一部改変)。

<sup>53)</sup> 前掲註4の文献②・④・⑥。

<sup>54)</sup> 前掲註53に同じ。

<sup>55)</sup> 前掲註4の文献⑦。



**最勝寺氏館跡** 沢氏館跡の南の台地上にあり、東の氾濫原とは比高差は約6mである。最勝寺氏は古代の税所氏の一族とされ、「九条右丞相師輔より出、6代孫道宗が寛治年間（1087～94）に下向し、姓は藤原朝臣、別当職にあった」（隼人町1985『隼人郷土誌』隼人町）。末裔が今でも居住する。台地の北側末端に、宝篋印塔・五輪塔・宝塔や近世の墓石などがまとめられた状態で残存する。明治維新時は25石。平成20年度に調査が実施され、幅約5m以上、深さ約4m、傾斜角度85度の堀が検出された。館の形状は菱形が推定され、規模は長辺85m、短辺60m、幅50mである。遺物としては大宰府分類白磁椀Ⅳ・Ⅴ類、青磁椀Ⅱb類、陶器・青花、国内産中世陶器、近世陶磁器などが出土している<sup>56)</sup>。

## 7 空間構造予察

宮内地区の空間構造に係わる館の規模・街道・短冊形区画・港湾等について検討を加える。

### (1) 館跡規模

図5・6でみるように、多数の社家の居住地が確認されているが、これまで調査された館跡は桑幡・留守・沢・最勝寺氏の四社家の館跡であり、ここではその調査結果を検討する。

規模をみると、桑幡氏館跡が南北90m、東西推定100m、留守氏館跡が東西70m、南北100m以上、最勝寺氏は東西85m、南北50mである。沢氏館跡は不明である。桑幡・留守氏館跡はほぼ1町規模とみることができる。

土塁・堀の有無をみると、土塁が残存するものは、桑幡・留守氏館跡で、堀は四社家すべてで見ついている。土塁は留守氏館跡からみて、幅は約10mで、高さは3m程度はあったと考えられる。また、堀の規模は場所によって異なるものの、3～7mの幅をもち、深さ2.5～4mを測る。その形状は箱堀と薬研堀がみられることから、時間差があることが想定されよう。

以上、四社家の館跡から、1町規模の館は堀と土塁で囲まれた空間ということが明らかになった。

### (2) 街道について

宮内地区の参道と一般道路が交差する場所は辻と呼ばれ、小字名としても今も残っている。辻とは、『広辞苑』<sup>57)</sup>によると「道路が十字形に交叉している所。四辻」を意味する。また、『新漢和辞典』<sup>58)</sup>でも「十字路。交差点」との説明があり、地区内を参道と交差する別の道路が走っている可能性が窺えた。現在、参道と直交する道路は、東郷宮内線と呼ばれる路線で市道であるが、昭和47年発行の隼人町内測量図には「二級国道小林浜之市線」と記され、宮崎県の内陸部へ繋がる路線であることが見て取れる。海岸から内陸部への街道だったことが窺われよう。16世紀に島津義久が浜之市港から霧島へ行く時に利用したコースでもあり、街道の存在が裏付

<sup>56)</sup> 前掲註4の文献⑧。

<sup>57)</sup> 新村出編1998『広辞苑』第五版 岩波書店。

<sup>58)</sup> 大修館書店1989『大修館 新漢和辞典』改訂第二版。

けられる<sup>59)</sup>。辻という地名は、史料から14世紀まで遡ることができる。『旧記雑録』の文和3(1354)年の記録に次のように登場する(鹿児島県1979『旧記雑録前編一』史料2552号, 857頁)。

「国分宮内澤氏蔵」

文和三年甲午八月十三日、上井富福丸解謝御馬毛付事、於敷祢假屋<sup>于時道乘之家</sup>、遂之、御使權惣  
 檢校兼舜、奉行人田所檢校永琮、覆勘使兵衛次郎定與、<sup>于時既別當、</sup>小使<sup>乙太郎弁官御供 兼所妻太郎 所弥五郎檢校・郎檢校</sup>等、同日<sup>申廻</sup>着于當假屋、會頭方因幡八郎<sup>富福丸之從父兄弟、</sup>有對合<sup>天</sup>酒肴行之、五獻之後、覆勘使立<sup>天</sup>、馬ノ  
 毛<sup>於</sup>檢見シ、口付ノ名字ヲ申ス、同十四日午剋、百疋ノ御馬毛付、次第<sup>仁</sup>自社頭池縁、至于  
 辻堂之鳥居邊<sup>仁</sup>引立之、口付面<sup>於</sup>持柵<sup>於</sup>、兼舜・永琮等者、中間左右<sup>仁</sup>座ス、(後略)

この記録からみて少なくとも14世紀中葉には堂のある交差点があり、宮内地区を貫く参道と直交する街道があったと指摘できよう。道幅を知ることができる近世の史料がある。中世にもあてはまるのか不明だが、参考になろう。文政6(1823)年の『道帳』<sup>60)</sup>である。

内村

(中略)

- 一、御前馬場辻堂より鳥居之元まで本九間通之由当分八間通り但内山田村境
  - 一、鳥居之元より上弥勒院屋敷掛り十間通り 境右同断
  - 一、弥勒堂前石壇柴植付之場所三ツの社より石橋下まで八間通
- (後略)

内山田村

(中略)

- 一、神田橋より留守城戸まで三間半通り但見次村境
  - 一、留守城戸より辻堂まで四間通り但右同断
- (後略)

参道の道幅は、辻堂(図6のC, 以下同じ)～鳥居(d)間が9間通りで、弥勒堂前の三ツ社付近が8間通り、弥勒院前が10間とかなり広い参道であったことが分かる。街道と考えられる南北の通りは神田橋(a)～留守城戸(b)間が3間半通り、留守城戸(b)～辻堂(C)が4間通りと7～8m幅の通りであった。その他、鬼の辻(e?)～天津渡場までは狭くなり2間半通りということも記録されている。

<sup>59)</sup>『旧記雑録』「大友御合戦御日帳写」天正6年9月12日の項にある、島津義久が鳩之脇に上陸し正八幡宮の辻道を通り霧島田口名に行ったコース(鹿児島県1981『旧記雑録後編一』史料1039号, 564頁)は、この街道を利用したものであろう。

<sup>60)</sup>国分郷土誌編纂委員会1997『国分郷土誌 上巻』国分市 459～460頁。

### (3) 港湾について

大隅正八幡宮と深く係わる湊に鳩脇八幡崎がある。この湊名は『平家物語長門本』にも登場する。安元3（1177）年の鹿ヶ谷事件で、俊寛や平康頼・藤原成経が「硫黄がしま」に流罪となったコースにあたる（図3）。赦免になった康頼・成経が上洛した時のルートを見てみると、「さつまがた、房の泊りといふ所より、鹿児島、逢の湊、木入津、向島をも押過ぎて、鳩脇八幡崎にぞ着き給ふ、それより取りあがりて、宮中の馬場執印清道と申がもとにやどせられたり」とある<sup>61)</sup>。康頼・成経の二人が、坊津から知覧、喜入、鹿児島、桜島を經由し鳩脇の湊から上陸、宮内の馬場清道という人の家に寄ったことが記されている。清道という人物は、平清盛と交流のあった桑幡氏第53代の息長清道である<sup>62)</sup>。

国分平野の西端に、現在は清水川と呼ばれる川がある。この川はかつて鳩脇川と呼ばれていたことが分かってきた。川の西に隣接する丘陵には「破戸脇」という小字名が残っている。伊能忠敬の測量図にも、清水川の位置が鳩脇川と記されており、伊能図に描かれた文化7年（1810）頃には清水川は鳩脇川と呼ばれていたことは間違いない。隼人町野久美田清水の場所が「鳩脇八幡崎」に比定できよう<sup>63)</sup>。

桑幡氏の「由緒書出帳」に「一、正八幡大永年間依御炎上、天文廿年九月日御尊躰御下向、桑幡末家三角道家使者也、即八幡崎<sup>ニ</sup>御着船、蒲生八幡之御輿備、鑰嶋宮<sup>ニテ</sup>奉移、着御有<sup>テ</sup>日新公御社参、御詠歌十一首有」とある（鹿児島県 2005『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ十』）。大永7（1527）年、旧国分市域を拠点とする本田氏との抗争で大隅正八幡宮が焼失した<sup>64)</sup>ため、天文20（1551）年に祭神を勧請し、桑幡氏一族の三角氏がその使者にたち、鳩脇八幡崎に着船したという記録である。16世紀半ばには鳩脇八幡崎が大隅正八幡宮と係わる海湊として機能していた<sup>65)</sup>。

### (4) 地籍図からみた区画

区画整理前の地籍図（図6）から宮内地区の空間構造を検討する。辻の交差点周辺から東側は、昭和50年代に区画整理され古い通りが消失し、当時の面影が無くなっているが、区画整理前の昭和46年頃作成の測量図と地籍図（千分の1縮尺）を入手し分析した<sup>66)</sup>。地籍図は、宮内

<sup>61)</sup> 図書刊行会編 1974『平家物語 長門本』名著刊行会 164頁。

<sup>62)</sup> 前掲註47の系図及び前掲註6④文献。

<sup>63)</sup> ①日本国際地図学会・伊能忠敬研究会監修 2002『伊能図』武陽堂 186頁、②重久淳一 2008「貿易陶磁器の終着点－錦江湾奥部の遺跡－」南さつま市坊津歴史資料センター輝津館 8頁。

<sup>64)</sup> 『旧記雑録前編二』の『調所氏譜恒房傳』の記録に「大永七年十一月、清水城主本田紀伊守董親及志布志城主新納近江守忠勝等、合師來伐宮内神官等、神官留守・桑幡・崎田・最勝寺等皆據社壇<sup>ノ</sup>、構之兵備、鬪、恒房亦自國衙趨偕以拒之、二十八日兵火罹社壇、社壇蕩燼、留守等潰走、桑幡乃奔于櫛間、崎田奔于山東、而恒房及最勝寺奔于麿府、寓居久矣、於是董親乃掠神領、自清水掌祀事者二十餘年、如守君神、亦渠族人本田刑部少輔親貞入道一怒自姬木領祀事云」とある（鹿児島県 1980『旧記雑録前編二』史料2107号、685頁）。

<sup>65)</sup> 『旧記雑録後編一』永禄元（1558）年の『山之口の野八幡宮棟札』の項にも「當社者辰旦國陳之大皇 御息女七歳、而爰日天之陽氣令懷胎、既在誕生、天王大驚、此是不可有唐朝之王胤<sup>ニ</sup>、到著之所於可君神國結構虛船令捨捨廣海、漸而隅州八幡崎在御著岸、即從天八流御輿來下而圍八方、故號正宮正八幡大菩薩」で登場する（鹿児島県 1981『旧記雑録後編一』史料114号、63頁）。

<sup>66)</sup> 測量図は、旧隼人町役場の倉庫に保管されており、『隼人都市計画事業 宮内地区区画整理事業』のタイトルで4冊の書類があり、その中に添付された地図等を平成21年2月に入手した。

地区全体からみると一部にすぎないが、現在居住している留守氏など明治維新時の社家名の記録との一致から、測量図は館の位置と規模を示し、分筆前の地籍図もその実態を表していると考えられる。宮内地区は、幸いなことに明治維新当時の子孫がまだそこに住んでおり、居住の場が同じであることから位置はほとんど変動していないと考えられる。その点で復原が容易であろう。ここでは便宜的に、通りを境界としてA～Oゾーンの15区に分割し、分筆前の区画の規模、最大長と最大幅を計測した。計測表は紙数の都合で省略するが、比較のため図8に規模分布を示した。図6の主な区画と居住者名を記すと、

I-18:126m×80m(留守氏館跡), I-32:150m×88m(栢山・留守家<sup>67)</sup>),

H-2:77m×70m(龍波見家<sup>68)</sup>), N-1:51m×50m(塚家<sup>69)</sup>)

分析の結果は次のとおりである。

- ①Eゾーンには、幅が約9mの短冊形の区画がある。
- ②Iゾーンには留守氏館と同じ規模の区画があり、Hゾーンにも龍波見家と同規模のものが並列する。
- ③区画規模についてみると、最大長・最大幅とも100m近い大きさのものから、70m, 50m, 30mのものがみられた。
- ④形状は方形、長方形の他、城館用語で横矢掛けとされるL字形も多く、一ヶ所だが凸形(L-2)がみられた。

これらのことから、次のようなことが考えられる。

- [1]Eゾーンの短冊形地割の4区画は旧道と併行し、一般的に道路と直交する町屋とされるような配置ではない。そのため、もし、この短冊形区画が町屋的性格を有するものであるならば、隣接する有力者の館の付属施設で、そこに住む住人、すなわち職人たちも抱えていた可能性も考えられる。
- [2]図6のI-13の細長い区画は留守氏館の門への通路で、留守城戸口(図6のb)から30mほど階段が続いていたとされる。発掘調査で検出された館周囲の堀とは別に、外側に比高3mほどの段差があり、現状でも確認できる。その段差が自然の切岸となり、防御が可能で、館まわりに土塁と堀を築くことで2重に防御ができる。この留守氏館跡は東側を除き、周りが堀からさらに外側10mほどで段差が付く地形となっている。とするならば、Iゾーンは全体を防御できる惣構的な箇所と想定できるかも知れない。また、宮内地区全体を2km×2kmの三角形の惣構とみるならば、三重の防御ラインとなるが、今後の検討課題である。
- [3]いくつかの大きさの規模の区画があるということは、社家間にヒエラルキーが存在していたことが窺われる。千田嘉弘氏の館規模でみると<sup>70)</sup>、(A)一辺200m前後のものは、「一

<sup>67)</sup> I-32の区画には、現在、栢山氏と留守氏の分家が居住している。栢山氏は留守氏の家伝によると、京都から一緒に下向したといわれている。

<sup>68)</sup> 龍波見家は現在の敷地の一角に石塔群があり、2m近い高さの五輪塔数基や永禄12(1569)年の年号が刻まれているものもある(霧島市教育委員会単人出張所2007『単人町の石造文化財(改訂版)』)。

<sup>69)</sup> 塚家は大隅正八幡宮との係わりは不明だが、戦前にはかなりの面積の土地を所有していたという。現在も50m四方の敷地に百年を越す建物や庭園がある。線路に土地を提供する前は、地籍図等からみて、1町四方の規模を有すると考えられる。

<sup>70)</sup> 千田嘉弘2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、187・188頁。



国から複数の国を分国としてもった大名の居城、主殿と会所が分立し、広場と庭園を伴った室町武家儀礼に則った空間構成」。武田氏館跡、大内氏館跡、大友氏館跡、美濃守護所革手城、土佐守護所田村城などが知られている。(B) 一辺100m前後のものでは、「一国からいくつかの郡を治めた大名の居城、ほぼ(A)と同様の空間構成」、朝倉氏館跡などがある。(C) 一辺50m前後のものは村落領主の居城で、「主要建物は雁行型などの特別な平面構成はとらず、いくつかの機能を集約した建物を使用し、庭園を欠くことも多い」。規模からみると、最勝寺氏館跡を除き、(B)の規模である。また、宝暦6年に建てられた近世～近代の留守氏館跡の建物は、母屋に主殿にあたるイチノオモテを内包することから、主殿として分立はしない(C)の要素をもつ。しかし、庭園が現存することや、規模は(B)に近い。近世以前は分立した(B)の構造を有していた可能性がある。

### (5) 短冊形地割について

「道路に面した間口が狭く奥行が長い連続する地割」が何か所かみえる。旧道に直交する幅が狭く細長い区画である。このような区画は、職人・商人の居住する町屋と考えられている。宮内地区全体の分筆前地積図を示した図5のa地点(神宮西側)についてみると、幅約10m、長さ約90mで、面積も約1,000㎡程度のものが4区画ある。他のb～d地点のものも幅・区画数は同様である。短冊形の区画は数区画で、かつ散在しているので断定できないが、これらは図6のEゾーンの並行する短軸形区画とは異なり、道路に対して直交しており、道路を意識した区画とみることができよう。これらを町屋として考えるならば、図6のEゾーンとは性格が異なり、宮内地区全体の町屋的な場所であったと思われる。

## 8 まとめ

以上、宮内地区全体の様相をまとめると次のようになる。

- (1) 発掘調査の成果から、四社家の館跡はすべて堀を築き、土塁をもつ館跡が2ヶ所、およそ100m近い規模を有するものが3ヶ所となった。千田嘉弘氏の(B)とした国人クラスの居館で、規格性を有することが明らかとなった。
- (2) 宮内地区全体の地形は川と低地に限られた三角形状を呈する。そこに分布する遺跡の位置からみて、大隅正八幡宮→寺院群→社家・百十家→川湊の分布構造が看取できる。中世後期の宮内地区の空間構造は、大隅正八幡宮を中心に寺院・社家館群が分布する半円構造を呈すると考えられる(図11)。さらに、その先、東側には国衙域とそれに続く「守護都市」が展開していたであろう<sup>71)</sup>。
- (3) 区画整理前の通りをみると、正八幡宮に近い街路は規則性をもたず、町場のゾーニングも未発達である。現在の参道の主軸方位はN-52°-Wで古代条坊の方位とは異なっており、12世紀以降、必ずしも正方位を基軸としない原理で宮内地区の空間構造は形成され

<sup>71)</sup> 国衙は前掲註25で述べたように、国分府中地区が有力だが、後に続くであろう守護所については明らかになっていない。しかし、中世に守護が置かれたのは明らかであり(前掲註6の④)、国衙域に守護所も置かれ、それを中心に都市的なものが広がっていたことは想像に難くない。今後の調査が待たれる。

たと考えられる。

(4) 地区内を走る街道の存在が窺われ、正八幡宮と深いつながりのある海湊、「鳩脇八幡崎」の存在があった。

宮内地区は大隅正八幡宮を中心とし、社家館・寺院群のある宗教勢力である。政治都市である城下町などに存在する構成要素としての単なる神社や寺院ではない。本来、宮内地区は、大隅正八幡宮を中心とする「荘園公領制の支配拠点としての都市であり、荘園支配の機構そのもの」であった。その意味では、そこに住むものの基本は神官・僧侶などの支配層にほかならないであろう。中世都市を境内と町屋に分節した伊藤毅氏は、境内系の空間には必ず中心核が存在するという<sup>72)</sup>。宮内地区でいえば、それは明らかに大隅正八幡宮である。それを中心として寺院群・社家館跡群が数多く分布する。社家館跡は、土塁や堀によって圍繞する結果をもつ。内と外が分けられ領域が指定されている。これらは伊藤氏のいうところの「閉鎖系」の構造である。四社家の館がまさしくそうである。この「閉鎖系」の構造が宮内地区全体に広がって「閉鎖系の集合」となり、低地と台地の境界をもつ地形的特徴からも外部に向けては二重の閉鎖系となっている。さらに、留守氏館跡はその地形からみて、「三重の閉鎖系」さえも存在する可能性がある。しかし、そこはまた、神社や寺院のもつ有機的な人のつながりである祭りやお参り・奉納という形をとおして人が集まり、人を受け入れる場所となり、時には外に向けての発信・開放する場所となる。浜下り行事や初午祭には今でも多くの人出がみられる<sup>73)</sup>。すなわち、閉鎖系の中に開放系の要素をあわせもつ空間が出現するのである。その開放性は、正八幡宮の修理等が隣国から調達されたことと<sup>74)</sup>、それに携わる修理職の動向などに影響を与えた可能性も考える必要があろう。荘園を越えた開放的性格へ繋がる動きがあるかも知れない。

以上、発掘調査で得られた成果をもとに、地籍図を参考に宮内地区の空間構造について考えてみた。しかし、十分な成果が得られたとは言い難く、宮内地区の研究は端についたばかりであろう。個別の館の規模や様相、大隅正八幡宮と密接に係わりのある湊、鳩脇八幡崎や街道の存在を指摘したのみで、「境内」内の空間構造や中世都市の属性として重要な宿や市などについては未解明のままである。「境内」と「町屋」の境界、街道と隣接して立地する社家館の関係など課題は多い。今後は発掘調査で見つかった出土遺物等の分析も加味しながら、宮内地区の重要性を引き出せるように、さらに多角的に検討する必要がある。

2008年度に霧島市中世史サマーセミナーが開催された。本論は、その時の発表の成果をまとめたものである。攷筆するにあたって、日頃、御指導を頂いている新田栄治・本田道輝・渡

<sup>72)</sup> 前掲註19。

<sup>73)</sup> 中世の記録にも登場する浜下り行事は、古代隼人族の霊を弔うために始まったとされ、鹿児島神宮から浜市の御幸地まで隊列が進む。10年前に60年ぶりに復活したが、沿道では多くの見物客が集う。また、初午祭は450年ほど前に始まったとされ、着飾った25頭ほどの馬と踊り連が、鉦や三味線で参道を踊り歩く。遠くは宮崎県都城市からも参加し、20～30万人の人出となる。このような時は、中世でも館や寺院の内外は渾然一体となったことが考えられる。

<sup>74)</sup> 修造役は荘園内にとどまらず、隣国薩摩・日向国にも賦課されていた（藤田俊雄 1983「鎌倉中期永年間の太宰府機構－大隅国正八幡宮大神宝用途をめぐって－」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢上巻』吉川弘文館 771～796頁）。このような時、当然修理役は外部と交渉することになり、ネットワーク形成の機会が増加すると予想される。

辺芳郎の諸先生方には感謝申し上げ、また、発表を契機に文献に疎い筆者に多方面から御教示・御指導を頂いた日隈正守先生にも深く感謝申し上げます。である。

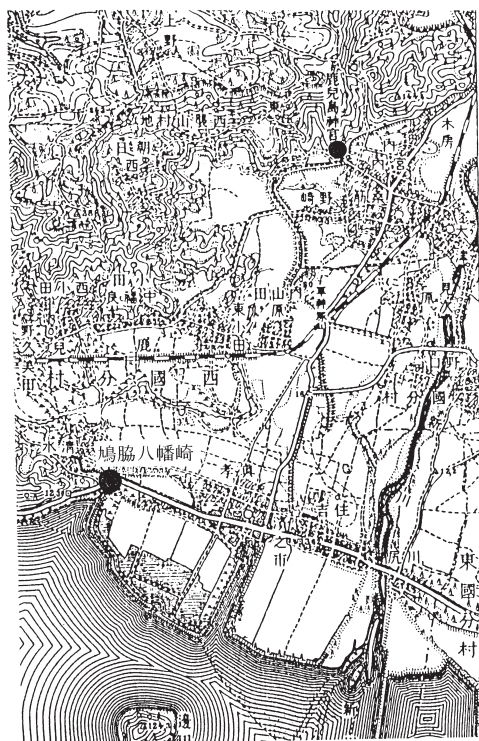


図1 遺跡の位置

国分

至国分

至那城



図2 三国名勝図会(大隅国喙啖郡項より)



図3 鹿見島の地名(註63の文献②より)



図4 宮内地区周辺図(註4)文献⑩より



中世大隅正八幡宮をとりまく空間構造



※記号は表1の分類に準ずる。各記号に同姓が複数あるものは、記号の新しいものを優先した。

図5 宮内地区分筆前の地籍図と社家名(地籍図をもとに作成)

表1 正八幡宮社家(明治維新時, 三ッ石友三郎編 1985『隼人郷土誌』より作成)

分類	No.	姓	名	家職	備考
A	1	桑橋	公幸	神主	四社家
A	2	留守	景憲	幡印留守	四社家
A	3	沢	俊雄	田所	四社家
A	4	最勝寺	三右衛門	別当	四社家
B	1	桑橋	清之進	修理别当	
B	2	三角	平八郎	正宮輪島别当	
B	3	桑橋	武兵衛	御所所别当	
B	4	隈元	方左衛門	修理所	
B	5	神田橋	甚吉	(修理所)	
B	6	大津	与市	(修理所)	
B	7	神田橋	新左衛門	檢非違使所長	
B	8	田口	伸一	(檢非違使)	
B	9	若宮	新吾	(檢非違使)	
B	10	崎田	新八	(檢非違使)	
C	1	梶所	源二	林鐘坊	衆徒十五坊
C	2	樺山	智定	智定坊	衆徒十五坊
C	3	樺山	寿	蓮寿坊	衆徒十五坊
C	4	樺山	成顯	成顯坊	衆徒十五坊
C	5	梶所	篤誠	宗門坊	衆徒十五坊
C	6	山田	連治	大門坊	衆徒十五坊
C	7	山田	千鶴	大覚坊	衆徒十五坊
C	8	樺山	庄太夫	香菓坊	衆徒十五坊
C	9	西	清政	講代坊	衆徒十五坊
C	10	崎田	千守	講師代	衆徒十五坊
C	11	西	五兵衛	田中坊	衆徒十五坊
C	12	龍波見	宗清	宗代坊	衆徒十五坊
C	13	龍波見	利春	寺師坊	衆徒十五坊
C	14	龍波見	七十郎	正覺坊	衆徒十五坊
C	15	土屋	開晴	岩下坊	衆徒十五坊
D	1	種子田	休温	殿守十二家	
D	2	川添	行温	殿守十二家	
D	3	小笹	香温	殿守十二家	
D	4	小笹	神政	殿守十二家	
D	5	宮地	大実	殿守十二家	
D	6	小笹	正進	殿守十二家	
D	7	轟木	休春	殿守十二家	
D	8	小笹	清遠	殿守十二家	
D	9	宮地	行満	殿守十二家	
D	10	小笹	休之進	殿守十二家	
D	11	宮地	宗八	殿守十二家	
D	12	前田	宗輔	殿守十二家	

分類	No.	姓	名	家職	備考
E	1	有田	行賢	山伏法体行者職	
E	2	丸山	符春	山伏法体行者職	
E	3	川島	宝益	山伏法体行者職	
E	4	川野	慶彦	山伏法体行者職	
F	1	神田橋	吉左衛門	四十七家	
F	2	川島	十兵衛	四十七家	
F	3	小笹	休之進	四十七家	
F	4	秋丸	休太郎	四十七家	
F	5	神田橋	小藤次	四十七家	
F	6	鎌田	柳右衛門	四十七家	
F	7	長瀬	四郎太	四十七家	
F	8	丸山	直左衛門	四十七家	
F	9	原口	庄次郎	四十七家	
F	10	原田	仲兵衛	四十七家	
F	11	井上	次郎左衛門	四十七家	
F	12	丸山	清之助	四十七家	
F	13	内田	飛助	四十七家	
F	14	平	隈嘉右衛門	四十七家	
F	15	増田	助兵衛	四十七家	
F	16	大津	伝藏	四十七家	
F	17	樺山	源左衛門	四十七家	
F	18	海江田	伊兵衛	四十七家	
F	19	川添	仲左衛門	四十七家	
F	20	森田	源太郎	四十七家	
F	21	海江田	新兵衛	四十七家	
F	22	池田	次右衛門	四十七家	
F	23	樺山	直左衛門	四十七家	
F	24	前田	栄助	四十七家	
F	25	樺山	善右衛門	四十七家	
F	26	小笹	亀太郎	四十七家	
F	27	原口	新助	四十七家	
F	28	能勢	新次郎	四十七家	
F	29	原口	喜之助	四十七家	
F	30	有馬	喜助	四十七家	
F	31	谷口	利右衛門	四十七家	
F	32	秋丸	四郎助	四十七家	
F	33	堀之内	孫四郎	四十七家	
F	34	秋丸	源次郎	四十七家	
F	35	海江田	次左衛門	四十七家	
F	36	原口	助次郎	四十七家	
F	37	海江田	甚四郎	四十七家	

分類	No.	姓	名	家職	備考
F	38	井上	藏助	四十七家	
F	39	原口	助左衛門	四十七家	
F	40	能勢	敬右衛門	四十七家	
F	41	原口	休助	四十七家	
F	42	田之上	宗実	四十七家	
F	43	秋丸	清右衛門	四十七家	
F	44				
F	45				
F	46				
F	47				
G	1	有田	伊右衛門	隼人十八家	
G	2	田之上	宗伝	隼人十八家	
G	3	勢之口	新助	隼人十八家	
G	4	能勢	仲右衛門	隼人十八家	
G	5	川島	鉄太郎	隼人十八家	
G	6	笠山	伊三次	隼人十八家	
G	7	田之上	宗善	隼人十八家	
G	8	小倉	与左衛門	隼人十八家	
G	9	春田	次右衛門	隼人十八家	
G	10	内田	伝次郎	隼人十八家	
G	11	小倉	孝右衛門	隼人十八家	
G	12	小倉	清太郎	隼人十八家	
G	13	小倉	小次郎	隼人十八家	
G	14	安楽	金四郎	隼人十八家	
G	15	樺山	十左衛門	隼人十八家	
G	16	堀之内	源助	隼人十八家	
G	17	岩城	権兵衛	隼人十八家	
G	18	種子田	□□	隼人十八家	



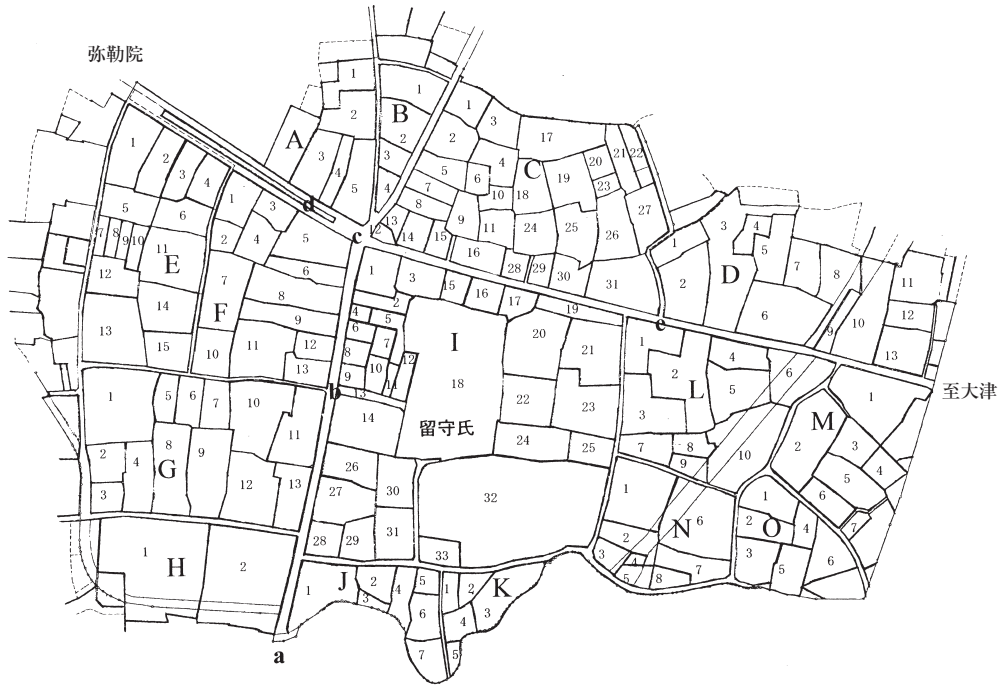
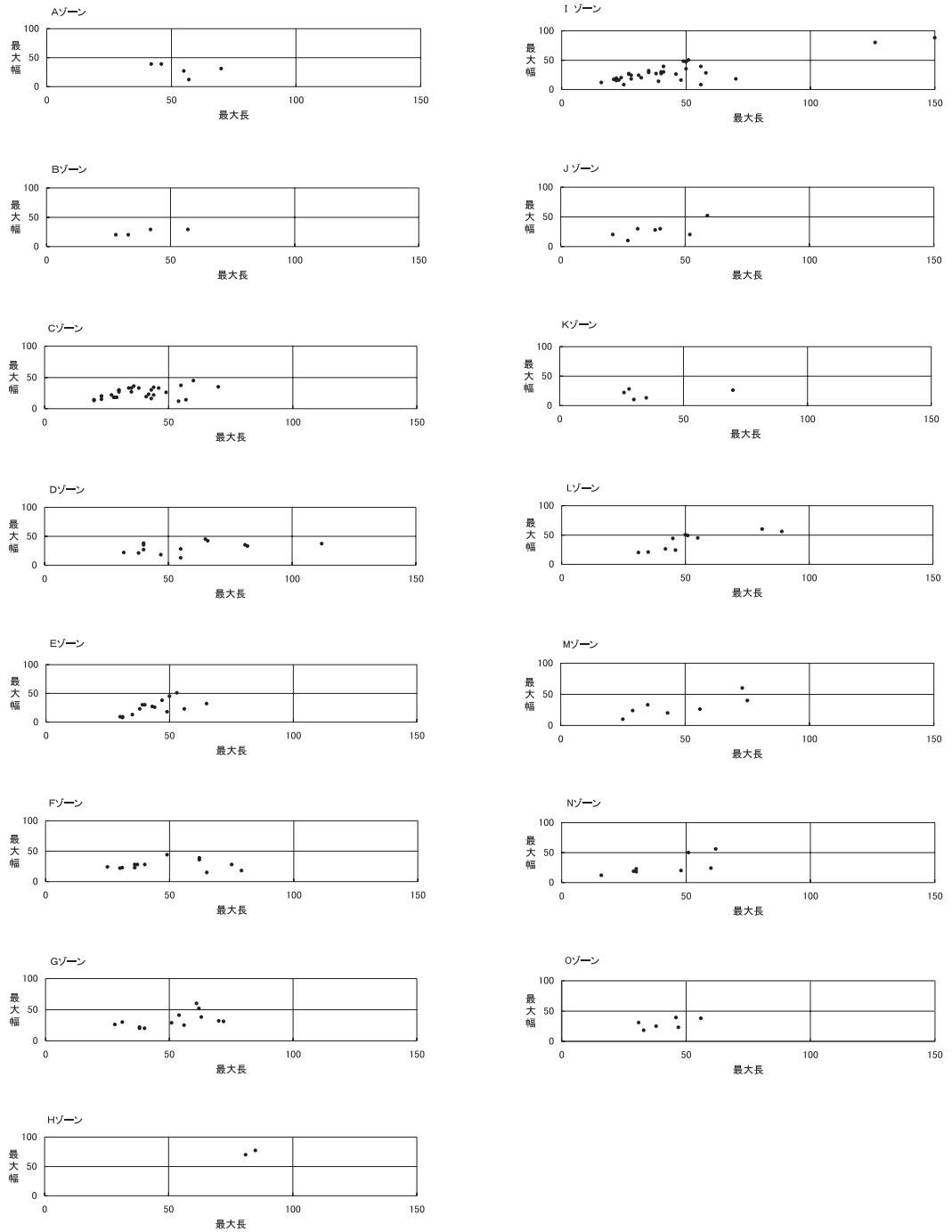


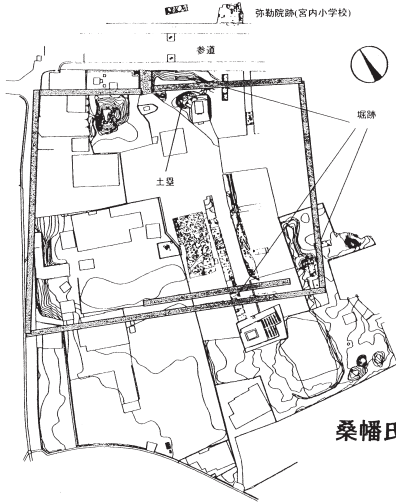
図6 区画整理前の地籍図(地籍図をもとに作成)



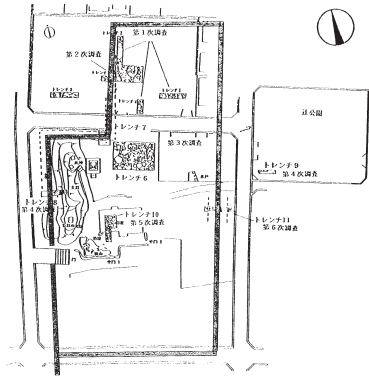
図7 区画整理前の測量図(昭和47年, 旧隼人町所蔵)

図8 ゾーン別規模分布 (単位はm)

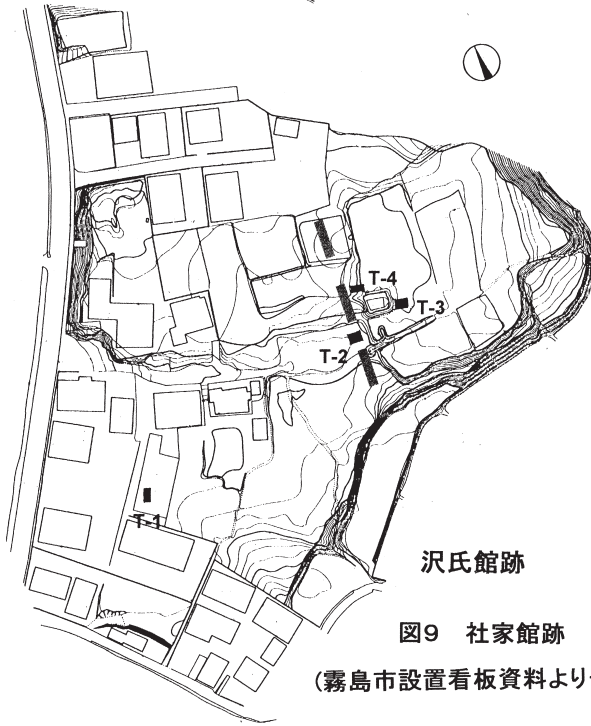




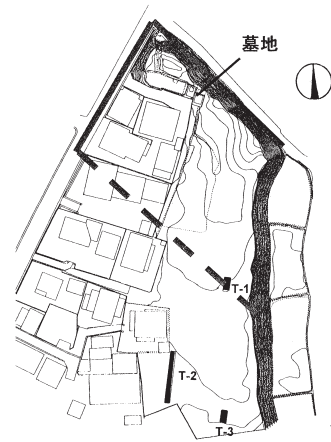
桑幡氏館跡



留守氏館跡



沢氏館跡

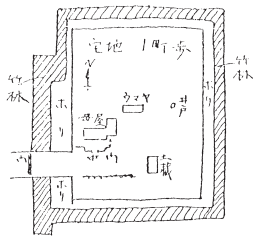


最勝寺氏館跡

図9 社家館跡

(霧島市設置看板資料より一部改変)

0 50m



集人町見次 留守氏宅配図

図10 留守氏館跡見取図(樺山1949より)

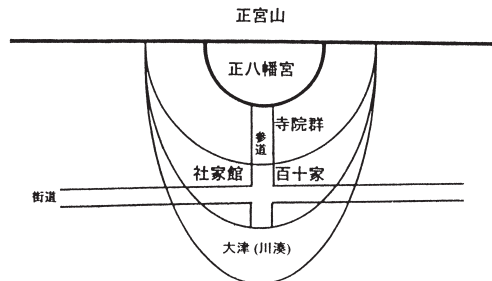


図11 宮内地区の空間構造

(霧島市教育委員会 2008『留守氏館跡Ⅲ』より)